インタビュー

シュベンス, ウテ氏

ドイツ図書館におけるデジタル出版物の長期保存 (デジタル・アーカイビング) について

Digital archiving in Die Deutsche Bibliothek DDB

印刷媒体の図書館資料に加えて、電子媒体の図書館資料が増加している。その中でも、いわゆるネット系の電子出版物を、図書館でいかに長期的に保存するかに関しては技術的な側面のみでなく、電子出版物の出版社との関係など種々の課題が提起されている。ドイツ図書館（フランクフルト）で電子出版物の長期保存（デジタル・アーカイビング）に尽力されている同図書館副館長ウテ・シュベンス氏にこのテーマについて話を伺った。

なお、ウテ・シュベンス氏は国立情報学研究所の日本情報の国際共有に関する研究に参加してきた。同研究所が2000年11月30日に主催した“日本情報の国際共有を目指して”と題する講演会で講演するため、同氏が来日された機会をとらえて本インタビューを行った。

——はじめにドイツ図書館（DDB）の役割、サービス、所蔵資料、ユーザサービスなどお話しください。

まずドイツの図書館の経緯をお話しします。ドイツでは20世紀のはじめまで国立図書館は存在しませんでした。1912年に初めてDDBという名称ではありませんが国立図書館が設立されました。それ以前はいわゆる州立図書館ないし諸侯や王室に属する図書館がありました。ドイツはいくつかの所領や公国に分かれていたからです。1912年に

出版社の援助を得てライプチヒに国立図書館が建てられました。つまり、国の願いではなく出版社の願いで国立図書館が設立されたといえます。これは国立図書館の機能を理解する上で重要な点です。

第二次世界大戦後、ドイツは東西ドイツに二分されましたが、ライプチヒは東ドイツに位置しているため、再度出版社は第二の所在地（フランクフルト：訳者註）に国立図書館を建設しました。以来約50年間、政治的にドイツは東西に分けられていましたので、国立図書館が2館別々に、同じような仕事をしてきたのです。政治的背景の違いから、両者の協力はわずかでした。1990年の東西ドイツ統一後、両国立図書館は統合されるに至りました。その一方、第二次大戦後、つまり1945年から東西統一に至るまでの間、ベルリンに音楽のみを担当する図書館、German Music Archiveが設立されました。当館の音楽資料、これにはレコード類も含まれますが、その収集規模は非常に大きいものです。ドイツ図書館は以上三つ（ライプチヒ、フランクフルト、ベルリン）が統合した国立図書館なのです。

ドイツ図書館（以下、Die Deutsche Bibliothek：DDBと呼ぶ）の役割は、ドイツ国内で出版されたすべての出版物を収集することです。書かれた言語は問いません。また、海外で出版された

* Schwens, Ute 2000年11月29日（水）東京都千代田区の科学技術振興事業団東京本部にて収録

ドイツ語によるすべての出版物、およびドイツに関するすべての翻訳資料、ドイツに関する図書すべてを収集しなければなりません。つまり、当館で収集する出版物はすべてドイツに関連したものです。ただし、今世紀に書かれたものという限定がつきます。したがって古い図書や資料、貴重書、原稿の類は収集していません。また外国の文献は、それが科学技術であっても社会科学、人文科学であっても収集の対象としていません。ただし、ドイツに関連するないしドイツ文学に関連する外国資料はこの限りではありません。これら外国資料ですとか、古い資料など国立図書館で収集しない資料はドイツ国内の別の図書館で収集します。

ドイツ図書館は、納本制度のもとでのドイツ出版物の収集とともに、この20年間、国内書誌情報の作成とそれに由来するその他サービスを実施してきました。これまで書誌情報は目録カード、磁気テープ、CD-ROMで提供されていましたが、現在はオンラインで提供されています。更にDDBは国際協力、例えば標準化、目録の問題などに関する諸外国図書館のパートナーとしての役割を担っております。

——科学技術分野の外国資料はドイツ科学図書館（TIB）がその収集にあたっていると聞いていますが。

そうです。外国資料についてはDDB以外の国内の各図書館がそれぞれ担当を決めて収集しています。科学技術を専門とするTIB、医学、化学、法律など分野別の規模の大きい図書館がドイツ国内に存在しています。

——DDBのユーザーサービスについて聞かせてください。

ユーザは館内の閲覧室でのみ資料を利用できます。インターネット経由でユーザは複写サービスを利用できますし、複写資料のオンライン提供もユーザが希望すれば行えます。しかし冊子体の図書館資料は館内利用に限られます。

シュベンス、ウテ氏

1977年に図書館学を専攻、3年間の勉学を終えた後、1980年にドイツ図書館に就職した。書誌部門で3年間、次に図書館長の秘書部門、および補佐を務めた後、1990年に書誌サービス課課長として国内および海外の図書館への書誌サービスを担当した。1995年から約2年間、更に図書館管理の研修を受け1996年末にドイツ図書館に戻った。以来、デジタル図書館の構築に関与し、マルチメディア閲覧室、デジタル化プロジェクト、オンライン出版物のデジタル保存に従事してきた。ユーザーサービスおよびアーカイビングの責任者を経て1999年6月にドイツ図書館副館長（常任）に任命された。

——DDBではデジタル出版物の長期保存、いわゆるデジタル・アーカイビングを実施していると聞いています。デジタル出版物にはオンライン系とCD-ROMといったオフライン系に分かれますが、こういったデジタル出版物はDDBの納本制度のもとでどのように扱われるのでしょうか。

DDBではデジタル・アーカイビングを開始したばかりです。納本制度の対象となる資料は図書類、視聴覚資料、いわゆるオフライン系の電子資料で、インターネットで流通しているオンライン出版物はドイツでは現時点で、納本制度の対象と

されていません。

現在我々は、オンライン系の出版物を収集するために出版者と交渉中です。出版社はDDBに対しそのオンライン出版物を提供することに大変関心を持っています、というのも、出版社は自らそのオンライン系出版物を長期保存するより、DDBに保存してもらいたいからです。オンライン系資料の長期保存は労多くして、商業的観点からは得はないのです。現在、DDBと出版社の数社との間で自主的な合意を結んでおり、一般の人々が使用できるようDDBはその電子出版物の送付を受けています。DDBではまず五つの出版社から始めました。その中にはドイツの大手出版社2社、すなわちSpringerとWiley Internationalのドイツ子会社であるWiley VCHが含まれています。これは自主的な合意で、この5社は正式にその電子出版物をDDBに自主的に納本し、ないし提供することを表明しています。

そしてDDBでは出版社に対し電子出版物とともに、それらの目録索引作成用にメタデータも併せて送付してくれるように要請しています。電子出版物はOPACの対象となりますから、ユーザはOPACでその所在を知ったならば、DDB内に限りその電子出版物を利用できます。一方、ユーザがインターネットからDDBのOPACにアクセスした場合は、該当する出版社サーバにリンクできます。著作権は該当する出版社に属しますので、ユーザはDDB経由でその出版物に自由にアクセスすることはできません。すなわち、ユーザはライブチヒもしくはフランクフルトに来館して、それ専用の閲覧室内でこれら電子出版物を無料で利用できますが、インターネット経由（オンライン）でDDBを利用する場合は、出版社のサーバにリンクするようになっていて、この場合は有料の利用となります。

DDBとしては登録および支払いシステムを実現して、インターネット経由でDDBにアクセスしてくるユーザにもDDB経由で電子出版物を提供できるようにしたいと考えています。これには今後の出版社との合意が必要です。

——オンライン系の出版物を対象とする納本制度施行の今後をお聞かせください。

これまでにオンライン出版物受け入れに関してかなり経験を積みましたので、2001年早々にはそれら出版物を含めた新納本制度に関する議論を開始します。また、2001年春には電子出版物の定常的な処理を始めます。そして五つの出版社以外の出版社にもDDBへの協力を拡げていきたいと思っています。

——著作権についてお聞きしたいと思います。オンライン出版物に関して、DDBは出版社とどのような契約を交わすのでしょうか。

現在のところ、その契約はモデル契約と呼ばれるものです。DDBは出版社と個別の契約は結びたくありませんので、よって契約は一つのみです。DDBではモデル契約を出版社協会に投げかけました。この契約原案はまとまり、合意を待っています。出版社協会との次回の会合は2001年2月ですが、そこでこの契約は受理される必要があります。新納本制度が施行されればこういった契約を別途結ぶ必要はなくなります。というのも、新制度はこの電子出版物の問題も、著作権の問題も扱うからです。しかし、自主的納本および自主的提供形態をとっている現状では一つのモデル契約を適用することになります。

——図書館と出版社との良好な関係を作ることは必要であると思います。電子出版物の長期保存は図書館、出版社いずれにとってもメリットがあると思われます。出版社はコストのかかる電子出版物の長期保存を図書館に頼むことができるわけですし、図書館はそういった出版物を広くユーザに提供できるからです。

私も同じように理解しています。

——デジタル・アーカイビングの問題点などお話しください。

現時点では、私も含め、誰もデジタル・アー

カイビングの問題を明確にお話しできる段階ではないと思っています。現在、欧州ではNEDLIBと呼ばれる欧州納本図書館ネットワークプロジェクトが動いています。私はこのプロジェクトに3年関わってきました。2000年末でこのプロジェクトは終了しますが、今後どういった問題点が生じるか知見を得ました。技術の進歩はめまぐるしく、5年前のCD-ROMを現在のマシンで動かすのはほとんど不可能な状況です。プラットフォーム、フォーマット、そしてソフトウェア等々に、いろいろな問題があります。これからの10年、いや20年もの間ずっとCD-ROMを使用できるようにするには多くの事柄をクリアしなければならないでしょう。

——今お話にでたNEDLIB (<http://www.kb.nl/nedlib/>) は2000年末で終了するというのですが、延長する予定はありますか。

ありますが、プロジェクトとしてではなく、日常の仕事として継続されます。このプロジェクトの成果としては、技術的な参照モデル、つまり電子出版物およびそれに関するメタデータの扱い方、そして両者のリンクの仕方があげられます。もう一つは、古くなってそのままでは利用できなくなってしまった電子媒体に記録された出版物を利用するための方策として、マイグレーションとエミュレーションのどちらかが望ましいかという点に関する考察です。マイグレーションとは、電子出版物に収録されている内容、つまりデータだけを取り出して現在利用可能なフォーマットに変換する技術です。それに対してエミュレーションとは、電子媒体がその当時稼働していたプラットフォーム（ここではパソコンやOS、記録されたデータを閲覧するためのソフトウェアなどを指す：訳者註）を現在のプラットフォーム上で仮想的に実現する技術です。本プロジェクトでは多くの場合はエミュレーションが望ましいとの教訓を得ました。もしそうでないとすると数年後には、我々の図書館は利用不可能な多くの電子媒体を抱

えた科学技術博物館になってしまいます。

——デジタル・アーカイビングにおいては、フォーマットなどの問題以外にも、CD-ROMによっては有効期限が設定されていて、それ以降は利用できなくなってしまうという問題もあると思います。

そうです。CD-ROMの保護メカニズムは大きな問題です。しかし、これは技術的な問題ではなく出版社と交渉すべき問題であると思います。そしてまた法律の改正の中で考慮すべき課題であると思います。

——オンライン出版物をユーザが利用する場合についてお聞きします。ユーザはDDBの専用の閲覧室内で電子出版物にアクセスできるわけですが、その際、ユーザは特定記事をフロッピーディスクなどにダウンロードできるのでしょうか。

できます。ユーザは雑誌全体でなければプリントアウトでもダウンロードでもできます。ユーザにはその場合、複写料金が課金されます。その内訳は図書館に支払う分と、図書館経由で出版協会に支払われる分になっています。後者は著作権料として出版社に渡されます。ドイツでは複写行為を行う図書館ないし企業は、著作権料に値する金額を出版協会に支払います。出版協会は徴収した著作権料を出版社に分配するというシステムをとっています。

——納本制度にかんがみますと、このようなオンライン出版物を出版社はどのように図書館に納めるのでしょうか。出版物のアクセスアカウントを発行するのですか、もしくは全ファイルを提供するのでしょうか。

両方です。昨年のDDBと出版社との協力プロジェクトでは、電子出版物が発行されるたびに、例えば週刊で、月刊で、個別にDDBがそれらを受け取るのは難しいというのが実感でした。よって、

配布を受けるときは年に2回程度にまとめるよう出版社に頼むのがよいと思っています。ただし、年に2回となると最新の号のアクセスができませんので、その場合は図書館のワークステーションから直接出版社のサーバに無料でアクセスするという方法が現実的な考え方であり、またそのようにしようと考えています。

——デジタル・アーカイビングとは別に、著作権の観点から図書館の複写問題についてお聞きします。米国には著作権センター（CCC）があり、例えば米国の資料を他国で複写する場合の著作権のクリアはその国におけるCCCに該当する機関がCCCと協定を結び、そこが著作権料の支払いをCCCに対して一括して代行すると聞いていますが。

ドイツの場合はそのようにしていません。ドイツでは前述したように図書館が複写に伴う著作権料をユーザから徴収し、それを出版社協会に支払い、出版社協会がそれを該当する出版社に分配するという実施だけです。具体的にはVG Wort（Werwertbybgsgesekksgaft Work）が印刷体、

電子出版物などの著作権料の徴収を行います。

——では最後の質問に移ります。デジタル・アーカイビングの展望、およびDDBのデジタル・アーカイビングに関してのこれからのチャレンジについてお聞かせください。

まず第一に、来年出版される電子出版物すべてをデジタル・アーカイビングの対象とすることです。次に、電子出版物の長期保存のための管理システムを実現することです。これには3年かかるでしょう。現時点ではシステムはまだ存在していません。これまで検討してきた参照モデルをもとに技術的問題を克服するために企業と協力をしなければなりません。先程申しましたNED-LIBのメンバーであり、しかも状況を同じくするオランダ国立図書館や英国図書館と共同することになりましょう。彼らは入札によって、デジタル図書館の技術的問題の解決のためにIBMを採用することに決定しました。我々もまた、2001年に入札を実施します。費用は1,200万から1,500万ドイツマルクかかりますので資金集めもまた大きな仕事の一つとなりましょう。

最後に留意すべき最も重要な点は、印刷体資料も忘れてはならないということです。電子出版物に多くの問題点を見ますが、DDBでは年間で新規受け入れの印刷体資料ないし音楽資料が20万点もあります。つまりこれも国立図書館の依然として大事な仕事なのです。

——どうもありがとうございました。

インタビューを終えて

ドイツの図書館を代表するDDBの副館長へのインタビューということもあったが、お会いしたシュベンス氏は（失礼かもしれないが）副館長というには意外にもかなり若かった。しかしながら、

出版社や政府との交渉、欧州の納本図書館との共同プロジェクトへの参加などの話を伺うにしたがい、デジタル・アーカイビングという技術的にも制度的にも克服すべき多くの課題を持つ、このテーマに立ち向かうにはかなりの行動力（パワー）が必要であることを痛感した。また、その取り組みからも、DDBがいかにこれを重要視しているかが分かった。

また、DDBの動向は、ホームページ（<http://www.ddb.de/>）で公開していくということであるので、興味ある方はアクセスしていただければと思う。

（聞き手 情報事業部調整課 斎藤隆行）

（文責 本誌編集委員会）